

変わる日本の「暮らし」と「まち」

命を守るためにつくった新しいまちに
温もりとにぎわいが戻ってきた

宮城県南三陸町
震災復興まちづくり事業
(2012年・平成24年)

阿部民子

text by Taniko Abe



illustration: Shigeyuki Sakata

宮城県北東部の沿岸部に位置し、東日本大震災で甚大な被害を受けた南三陸町。2019年11月、約2年半ぶりに訪れたたちは、大きく様変わりしていた。

何度も付け替えしながら工事していた幹線道路の整備が進み町内の移動もスムーズになり、また、三陸道の建設も進んだことから仙台からのアクセスが格段に向上した。居住地域は高台に移転することから山肌が造成されていたが、そこには真新しい住宅が建ち、建設・整備中だった大型商業施設や

病院、保育所、南三陸杉を使用した瀟洒な町役場などが立ち並ぶ。11月17日には、町民の憩いと運動の場だった松原公園が、海沿いから内陸に場所を移して開園。開園を祝して開催された「南三陸スポーツフェスティバル」では、震災前の町民運動会のように、明るい歓声と笑顔があふれた。

つながりを育む施設が開館

津波で二度と命を失わないように、という強い思いのもと、「なりわいの場所は様々であっても、住

この地での復興事業に携わり、2019年4月に再び赴任した。「当初赴任時は、瓦礫の山を前にして、机に座る暇もない日々でした。4年ぶりに戻ったたちは、景色がまったく変わっていました。私自身技術畑の人間なので、これだけのスピード感で山を造成し、道路を通す現場の大変さがどれほどなのか、身に染みてわかります」と、まちの変貌ぶりに驚く。

土台づくりを終えたまちでは、新たなコミュニティづくりの芽が育ち始めている。その1つが、2018年4月に開所した「結の里」だ。デイサービスセンターと誰もが気軽に集える交流スペース「えんがわカフェ」と、施設の運営を担う社会福祉協議会のスタッフが常駐する「ささえあい支援オフィス」などが入った、全国でも珍しい複合施設になっている。

施設の構想やコンセプトは、南三陸町を中心に、国や県、外部有識者そしてURが参画した検討会においてとりまとめた。新しい環境で周りに知り合いのいない高齢者や子育て世帯などの交流拠点となるように、URが整備した志津

川東災害公営住宅と一体化して計画。災害公営住宅の集会所や芝生広場などを共通して使える構造になっているのも特徴だ。

管理責任者を務めるのは南三陸町社会福祉協議会の高橋吏佳さん。「ここは、町民のみならずが気軽に集い、ふれあう『みんなの居場所・ささえあいの拠点』です。10月に行われた『走らないミニ運動会』では、地域の皆さんが実行委員として活躍し、子どもからお年寄りまで一緒に盛り上がりました」と笑顔で話してくれた。

次世代につながるまちづくり

もう1つの拠点が、「南三陸町生涯学習センター」だ。町が災害復旧工事として建築した最後の公共施設として、2019年4月に開館。公民館と図書館の機能を併せ持ち、100人を収容できる大研修室や和室、調理実習室のほか、DVD鑑賞コーナーや学習室、独立したキッズスペースなどを備えている。

恰幅の良い風貌と明るいキャラクターで、「トトロ館長」として親しまれている佐々木仁一さんは、



南三陸町生涯学習センターは、木のぬくもりが感じられ、陽の光を取り入れる明るいスペース

まいは高台に」との基本方針で進められた南三陸町のまちづくり。住宅や公共施設は安全な高台に移転。低地部は、宅地をつくるために削った山の土砂でかさ上げし、「南三陸さんさん商店街」をはじめとする観光やなりわいの場所を生む壮大な復興が進んできた。

震災直後から南三陸町の新しいまちづくりを支援してきたのがUR車ごと津波に流され、九死に一生を得る壮絶な体験をしたという。「これから何を目的に生きていけばいいのかと考えたとき、地域の人を笑顔にして地域を元気にすることが自分の役目だと思ったんです。ここはその拠点として、赤ちゃんから高齢者までたくさんの人に来ていただきたい。その願い通り、学校帰りに勉強に来る学生やサークル活動、研修と、連日多くの人でにぎわっている。

震災以来、すべての復興の陣頭指揮を執ってきた佐藤仁南三陸町長に話を聞いた。

「震災の翌日、瓦礫だらけの町を見て、どうやって再建していくのか途方にくれました。でも、先日の台風19号で、以前は浸水していた場所に住んでいた町民に一部の地域を除いて避難指示を出さなくてもよくなり、冠水していた場所も震災後の工事のおかげで被害を受けずに済んだのです。それを見て、震災後にURと進めてきた安心安全なまちづくりは間違っていない。今後は、12月に一部開園した震

だ。志津川地区の市街地整備や災害公営住宅整備を担い、2019年3月には低地部の宅地も完成。町民とともに、植樹祭をおした公園の幅広い活用を検討するなど、今も未来へのまちづくりに向けて、さまざまな場面で町を支え続けている。

UR南三陸復興支援事務所長の佐光清伸は、震災直後から4年弱 復興祈念公園を皮切りに、公園と南三陸さんさん商店街を結ぶ中橋、震災復興伝承施設の開館と、未来への継承を担う施設が続々と完成を控えている。また、自治体として世界で初めてFSC(森林管理協議会)、ASC(水産養殖管理協議会)の2つの認証を取得。2018年には、志津川湾がラムサール条約湿地に登録されるなど、豊かな自然を次世代へつなぐモデルタウンとしてのアピールも始まった。

佐藤町長は続ける。「この8年8か月、ただただ走り続けてきました。振り返るとあつという間です。震災復興事業も、いよいよラストスパート。本当に多くの自治体や団体、企業、個人にお世話になりました。今、その方々に感謝状を手渡すため、全国に出向いているところです。今の気持ちを言葉に表すとするならば…難しい言葉じゃなくて『本当にありがとう』。ただ、その一言に尽きますね」

街に、ルネッサンス

UR 都市機構

一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます

【企画制作】新潮社